

土門拳著『死ぬことと生きること』

(星野博美解説) (みずず書房)



戦後日本を代表する写真家、土門拳。その名を聞くと、筑豊の子どもたちや古都の大仏を撮影した例の有名なシリーズではなく、哲学書のようなタイトルを冠したこの一冊のエッセイ集をまささき思い出す。

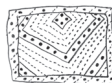
目次を開けばすぐに心を奪われる。「梅原龍三郎を怒らせた話」「おでこのしわ」「久保田万太郎の鼻」「マダム・マサコの頬骨」等々。揺るぎない主張をもった菌切れのよい短文と筆の勢いに圧倒されつつ、すぐに次を読みたくなる。土門の内面に迫る解説文と、ぬくもりのある橙色の装丁という出版社の演出も心憎い。存命であれば、一度土門拳その人に会ってみたかった。そう強く思わせてくれる。

本書に収められている土門の代表作、斎藤茂吉の肖像写真、茂吉という人間の飄々とした捉え難さを見事に捉えた一枚。土門がこだわり続けたリアリズム論を読みながら、短歌のそれを思い起こす人も少なくないはずだ。この昭和の写真家は、歌に関わる人にとっていまだに多くを教えてくれる先達でもある。

(岩崎佑太)

映画「カムイのうた」

(2023年9月北海道東川町せんとびゅあー
講堂)



北海道に暮らしていると、アイヌ語を身近に感じることもある。庭から見える山はトラウムシ、近くの小川はペーパン川、カムイコタンは地名など、アイヌ語の発音をカタカナにあてはめて表記している。声に出して読むのは楽しい。だから少しずつでもアイヌ語を覚えたいと思っていた。

昨年九月北海道東川町の制作協力で完成したこの映画の試写会で、主人公のモデルとなった知里幸恵さんのことを知る。アイヌ語は文字を持たない独立した言語で日本語とは違う。そのアイヌ語と日本語を結びつけたのがアイヌ民族の知里さんだ。知らないでは済まされないアイヌ民族への理不尽な差別迫害の歴史と、その中で生きた知里さんの十九年の短い一生がぐさりぐさりと胸に刺さる映画だ。

北海道にはアイヌ語由来の言葉がたくさんある。北海道の地が自然を愛するアイヌ民族のものだったのは明らかだ。だからこそ、この大好きな北海道をより深く広く知るためにアイヌの言葉だけでなく、もっといろいろなことを学んでいきたいと思う。

(小松理英子)